



東方地域都市計画住宅機構

EASTERN REGIONAL ORGANIZATION FOR PLANNING & HUMAN SETTLEMENTS

EAROPH 2015 佐賀・嬉野地域セミナー

REGIONAL SEMINAR IN JAPAN URESHINO/SAGA

報告書

地域資源を生かした活力ある都市・住宅の形成

Planning and Housing Focused on Local Resources



EAROPH2015 佐賀・嬉野地域セミナー実行委員会

WORKING COMMITTEE

EAROPH REGIONAL SEMINAR IN JAPAN URESHINO/SAGA

主催：EAROPH EAROPH JAPAN 佐賀県 嬉野市

後援：国土交通省

特別後援：九州旅客鉄道(株) (一社)佐賀県観光連盟 (一社)嬉野温泉観光協会 嬉野温泉旅館組合

報告書発行にあたり

2013年11月のマレーシアジョホールバルでの地域セミナー開催の立候補表明から2年を経て今年2015年に佐賀・嬉野地域セミナーの開催となりました。この間矢島隆EAROPH JAPAN副会長を中心に準備検討会、組織委員会、実行委員会を立ち上げ、2003年開催の長崎県大島町での地域セミナーを参考に事業を進めてきました。

EAROPHという国際組織の活動にも改めて認識を深め、そして開催の重要性と意義を模索しながら当市では初めてとなる国際会議であったため、参加各国の慣習や生活様式など考慮しなければならない多くの課題もありました。幸いこのEAROPHに参加される方々のほとんどが既に日本を訪問されており、今回は嬉野流でのおもてなしを基本に進めていくことにしました。

ちょうどこの時期の嬉野は新緑の季節であり、特産のお茶の生産が最盛期を経たところで皆様には嬉野緑茶、嬉野紅茶でくつろいで頂きました。

さて、セミナーについては1日目の全体会と2日目の分科会はそれぞれ日英の通訳を配し進行しました。参加者のほとんどが国内からである事を考慮し、またEAROPH活動をより多くの方に知っていただくために同時通訳と逐次通訳を導入しました。分科会では逐次通訳となりましたが各発表者の研究や調査内容など非常に分かりやすかったとの評価も頂きました。

また、1日目午前中と3日目のツアーにはそれぞれ20数名の参加がありました。特に1日目の茶業研修施設での釜炒り茶製造体験と茶染め体験には皆様感動され、3日間の日程を無事終了することができました。

本報告書は全体会を主にとりまとめたものですが、分科会における論文発表の論文集については別冊でとりまとめております。今回のセミナー開催による成果が皆様方の地域やまちづくりにお役に立つことを切に願っております。



EAROPH2015 佐賀・嬉野地域セミナー
実行委員会会長 谷口太一郎
(佐賀県嬉野市長)

目 次

開会あいさつ

組織委員会会長代理	副島 良彦	1
実行委員会会長	谷口太一郎	2
EAROPH 会長	Hermanto Dardak	3
国土交通省都市局長	小関 正彦	4
都市計画協会会長	板倉 英則	5

プログラム	6
-------	---

地域セミナーの記録

1. 基調講演	7
2. パネルディスカッション	18
3. 歓迎レセプション	21
4. 分科会	22
5. 閉会式	23
6. ツアー	24

あとがき	25
------	----

資 料

1) 開催までの足取り	26
2) 開催組織	27
3) 会議を終えて	28
4) 記録写真	31
5) 参加者・協賛者名簿	36

Table of Contents

Opening Remarks

Vice Governor of Saga Prefecture:

Yoshihiko Soejima 1

Seminar Chairman and

Mayor of Uresino City: Taichiro Taniguchi 2

EAROPH President: Hermanto Dardak 3

Director General, City Bureau, Ministry of Land,
Infrastructure and Transport:

Masahiko Ozeki 4

President of Japan City Planning Association

Hidenori Itakura 5

Seminar Program 6

Seminar Record

1. Keynote Speech 7

2. Panel Discussion 18

3. Welcome Reception 21

4. Sub-sessions 22

5. Closing Ceremony 23

6. Study Tour 24

Afterword 25

References

1) Invitation process of the seminar 26

2) Seminar Organization 27

3) Review of the Seminar 28

4) Photographs 31

5) List of Participants
and Cooperated Organizations 36

ごあいさつ



佐賀県副知事 副島良彦
EAROPH2015 佐賀・嬉野地域セミナー組織委員会
会長 知事代理

このたび、EAROPH（エアロフ：東方地域都市計画住宅機構）2015 佐賀・嬉野地域セミナーがこのように盛大に開催されますことを主催者のひとりである佐賀県として、大変嬉しく思っております。

そして、ようこそ佐賀県へ。国内外から遠路遥々お越しいただきました皆様を心から歓迎申し上げます。

ここ佐賀県は日本列島の南西部にある島の九州の北西部に位置しており、北は海の幸が豊富なリアス式海岸と砂浜の玄界灘、南はノリ養殖やムツゴロウが有名な干潟と干拓地の有明海という、2つの豊饒な海に面しています。

また、県南東部は九州有数の穀倉地帯となっている佐賀平野が広がり、豊かな自然が県民の身近にあり、触れ合いながら暮らしていける土地柄となっています。

今セミナーのキーワードであろう「地域資源」についても、先ほどご紹介した有明海のノリ、呼子のイカ、ハウスみかんをはじめとした農林水産物、有田焼などの陶磁器や唐津くんちなどのお祭り、広大な佐賀平野を利用したスカイスポーツではアジア最大級を誇る熱気球の国際競技大会である「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」などスポーツの地域資源もあります。

また、2000年前、大陸から稲作文化が渡来した弥生時代の大規模環濠集落跡の吉野ヶ里遺跡、豊臣秀吉が文禄・慶長の役の際に拠点とした名護屋城跡など歴史的遺産が県内には数多くあるほか、幕末以降の近代産業遺産も多く存在し、日本の近代造船の礎を築いた三重津海軍所跡、日本初の鉄製大砲鑄造所である築地反射炉跡などがあります。

特に三重津海軍所跡地は「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の一つとして世界遺産への登録を目指しており、去る5月4日にイコモス（国際記念物遺跡会議）より、世界遺産への「記載」勧告を受けています。

このように佐賀県は古くから科学的・文化的活動の盛んなところで、活かすべき地域資源が豊富にあると自負しているところでございます。

また、明後日は、日本で初めて磁器を焼成し、来年の2016年に日本磁器誕生・有田焼創業400年を迎える焼き物の町、有田もご視察いただくと聞いております。

ご参加の皆様におかれましては、この機会に、佐賀県の地域資源に直接触れていただき、その魅力を感じていただければ幸いに存じます。

最後になりますが、今回の開催にあたり後援いただいた国土交通省さま、協賛いただいた団体の方々に深く感謝申し上げますとともに、ご列席の皆様のご活躍とご健勝を祈念いたしまして、ご挨拶いたします。

開会あいさつ



佐賀県嬉野市長谷口太一郎

EAROPH2015 佐賀・嬉野地域セミナー実行委員会会長

EAROPH2015佐賀・嬉野地域セミナーに日本国内はもとより、世界8カ国からのご参加をいただき嬉野市で開催できる事を大変嬉しく思います。

さて、今回のセミナーの大きな目的であります人間の居住環境と街整備については嬉野市では1942年から区画整理事業を着手しており、地方都市ではまだ珍しく先進地として注目された自治体でした。現在は第8区画整理事業が終了し、2022年の新幹線開業に向け駅周辺整備の区画整理事業に着手しています。

また、人にやさしいまちづくりを推進しており、市内のUD (Universal Design) 化により誰でもが快適に過ごせる環境を目指しています。3日間の短い期間ではありますが、嬉野流日本のおもてなしで皆様を歓迎したいと思えます。どうぞ佐賀県と嬉野市をご堪能いただき、よき思い出を作ってくださいますようお願いいたします。

最後になりますが、今回のセミナー開催にご支援を頂きました国土交通省、佐賀県、都市計画協会またご協賛を頂きました皆様方には厚く御礼を申し上げ歓迎のご挨拶といたします。

Greeting from mayor Taichiro Taniguchi

Chairman, Working Committee of EAROPH 2015 Regional Seminar in japan , saga/ureshino

I would like to welcome EAROPH members and all delegates to Ureshino. The aim of EAROPH Regional Seminar is to exchange knowledge and information how to develop local resources. Ureshino has been vigorously performing urban developments such as Kukakuseiri(Land and Readjustment) to create vibrant human environment focusing on local resources since 1942, and one of these Kukakuseiri projects is now ongoing around the new railway station of Shinkansen that will be operated in 2022. In addition, Ureshino promotes “Universal Design Program” for aiming pleasant daily life. I look forward to meeting you and engaging in discussion and learning about diverse regional experiences related on sustainable human settlement. And I hope all of you enjoy the Japanese atyle hospitality during your stay in Ureshino.

EAROPH 会長あいさつ

Greeting from EAROPH President

Dr. Hermant Dardak



Ureshino Mayor Mr. Taniguchi, Sagaken Vice Governor Mr. Soejima, MLIT Director General Mr. Ozeki, President of City Planning Association Mr. Itakura, distinguished guests and EAROPH officials and members, good afternoon. I express my deep appreciation for this regional seminar held at such beautiful city, Ureshino. We met in Jakarta last year and could meet again here. Thank you very much.

Now, I would like to deepen the partnership among EAROPH countries and to get more members from various fields. We are the member of non-governmental organization and need to meet various professional people as much as possible. I hope that this 2-day seminar will bring us fruitful results. Thank you very much again.

佐賀県副知事副島良彦様、嬉野市長谷口太一郎様、国土交通省都市局長小関正彦様、都市計画協会会長板倉英則様、名誉会長、事務局長、副会長、そしてEAROPH理事会の皆様、最初に心から感謝の念を佐賀県、嬉野市に申し上げたいと思います。温かく歓迎していただきそしてこのEAROPHの地域セミナーの素晴らしい準備をしていただきました。また、第48回EAROPH理事会もここ嬉野市で開催する準備の労をとっていただきました。ありがとうございます。

ご出席の皆様に対してはこの重要なミーティングが美しい嬉野という場所で開かれ、そしてこのセミナーにご参加いただきましてありがとうございます。

EAROPH地域セミナーの目的ですが、これは地域資源の活用に関する知識と情報を交換するという事です。ご存じのように嬉野市には長い歴史があります。精力的にまちづくりを進められ、そして活力ある人間環境を1942年から形成すべく努力されてきました。その中心となったのが地域資源であります。

昨年EAROPHの世界大会がジャカルタでありましたけれど、この会議でお会いして以来素晴らしい準備を進めてくださいました。ほんとうに有難うございます。

これから2日間にわたりセミナーと理事会を開催しますが、特に重視しているのが色々な地域、セクター間、そして職域を超えたメンバーシップを増やしていくということです。

各国のEAROPH支部はEAROPH全体が非政府組織であり他分野にわたる組織であるので、いろいろな専門の方々に関わる必要があると思います。

これから2日間の会議が実り多きものであること、そして私たち全てにとって非常に生産的なものであることを記念して、私のご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

祝 辞



国土交通省都市局長 小関 正彦

本日、ここに EAROPH 2015 佐賀・嬉野地域セミナーが開催されるに当たり、一言お祝いを申し上げます。

この会議のために、遠方より来日された皆様を心より歓迎申し上げます。

都市や地域は、経済、社会、環境、自然災害など様々な変化に対応していく必要があります。こうした変化に柔軟に対応できるレジリエントな都市や地域をつかっていくためには、それぞれの都市や地域の資源を把握し、活用していくことが重要です。

本日、豊かな自然に恵まれ、人にやさしいまちづくりを推進しておられるここ嬉野において、アジア・オセアニア各国の研究者、行政関係者等により、各国における取組について、ご討議されることは、今後のまちづくりの展開を図る上で、大変有意義なことと考えております。

さて、我が国においては、昨年、政府に「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、政府全体として、個性あふれる地方の創生により、経済の好循環の波を全国に広げ、各地域で若者が元気に働き、子供を育て、次世代へと豊かな暮らしをつないでいく取組が重要とされており、国土交通省としても、都市全体の構造を見渡しながら、住宅及び医療、福祉、商業その他の居住に関連する施設の誘導と、それと連携した公共交通に関する施策を講じることにより、コンパクトなまちづくりを推進していくことが必要であると考えております。

本セミナーは、「地域資源を生かした活力ある都市・住宅の形成」を全体テーマとして、基調講演に続いて、①人間居住・環境、②医療・観光、③インフラとまちづくり、この3つのサブテーマに基づく有識者による論文発表と意見交換及び現地視察会などが行われ、参加各国の代表により、まちづくりや居住問題の解決のための議論が行われるとうかがっております。これらの議論は、我が国の都市計画、まちづくり、住宅行政などに関する施策の推進に大きく寄与するものであると期待しております。また、日本のまちづくりの経験が海外の都市や地域の抱える課題の解決に参考となれば幸いです。

結びに、本セミナーの開催にご尽力頂きました、EAROPH、EAROPH JAPAN、佐賀県、嬉野市を始め関係各位に改めて敬意を表するとともに、お集まりの皆様方の益々のご発展、ご健勝を心より祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

ごあいさつ



都市計画協会

会長 板倉 英則

EAROPH 2015 地域セミナーの開会に当たり、EAROPH JAPAN を代表してごあいさつ申し上げます。

まず、EAROPH の皆様及び関係の方々、この日本におけるセミナーに多数御出席くださったことに対し、心より感謝申し上げます。

さて、都市問題、住宅問題の様相はさまざまではありますが、いつも各国の大きな政策課題の一つとなっております。例えば、成長途上の国においては、往々にして経済の発展に都市機能や住宅環境の整備が追いつかないという問題が発生します。一方、ある程度の経済発展を実現した国のいくつかでは、人口の高齢化と減少、各種都市機能の遊休化、都市の空洞化などの課題が大きくなってまいりましょう。更にいくつかの国では、何年かに一度、台風や津波などの大きな天災に直面し、多くの人命と資産に被害を受けております。

このように、都市問題や住宅問題は、各国毎にその発展水準や地理的経済的特性に応じて、様相が大きく異なっております。しかし、このような様々な課題に対して、血のにじむような努力をして、その解決に当たってきた国々の経験は、必ずや他の国にとっても貴重な参考となることは確実であります。また、何事かを行おうとする時に、一国のみで対処するよりも、複数の国や団体ができる限りの努力をして事に当たる方が、より大きな成果をより短い期間で達成できるでしょう。

EAROPH のセミナーは関係する国や団体、さらには個人の知恵と情報を交換し、提供しあって、只今申し上げたような活動を行うことにより、参加地域全体のより大きな発展に寄与するものであると確信しております。

本日は、EAROPH 会長である Dr. Hermant Dardak 様、他 EAROPH の幹部の方々には、はるばる足を運んでいただき、また日本国内からは国土交通省都市局長小関様のご出席をいただくなど、多くの要職にある方にご参加をいただき、厚く御礼申し上げます。

また、今回のセミナーの開催に当たっては、佐賀県、嬉野市の方と、国土交通省九州地方整備局の方々、さらには多くの協賛の御支援、御協力をいただき、心より感謝申し上げます。当地、佐賀県嬉野市は比較的小規模な都市ではありますが、多くの近代的交通機能と豊かな天然資源や歴史・観光資源に恵まれております。

この清々しい空気と豊かな緑と肌を美しくしてくれる温泉に囲まれた中で、皆様によって有意義な討議をされますことを心より期待し、開会に当たってのあいさつといたします。

ありがとうございました。

プログラム

DAY 1 <Monday June 1> 6月1日(月)											
08:30-13:30	Registration 登録 <Ureshino City Hall/LIBERTY 嬉野市公会堂/リハティ>										
13:00-13:45	Opening Ceremony 開会式 <LIBERTY/リハティ>										
13:45-14:30	Keynote Speech 基調講演 <LIBERTY/リハティ> Dr.Mitsuo Morozumi, Professor Emeritus, Kumamoto University, Japan										
14:45-16:45	Panel Discussion パネルディスカッション <LIBERTY/リハティ> (Moderator) Hirchide Konami, EAROPH JAPAN Taichiro Taniguchi (Mayor of Ureshino) Kiyonori Miisyo (Architect) Donnell Davis (Founder Environess) Yuka Himeno (Oita University) Norliza Hashim (EAROPH)										
16:45-17:00	2016 World Congress Presentation <LIBERTY/リハティ>										
18:00-20:30	Welcome Reception 歓迎レセプション <Wataya-Besso/和多屋別荘>										
DAY 2 <Tuesday June 2> 6月2日(火)											
08:30-11:00	EXCO Meeting 理事会 <Taisho-Ya/大正屋>										
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>Concurrent Session (1) 分科会(1) Taisho-Ya (Heian-no-Ma)/大正屋(平安の間)</th> <th>Concurrent Session (2) 分科会(2) Taisho-Ya (Tancho-no-Ma)/大正屋(丹頂の間)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Human Settlement: ecology, environment, health and tourism</td> <td>Development & Management infrastructure, transportation, urban design</td> </tr> <tr> <td>(Moderator) Dr.Nobuo Mishima</td> <td>(Moderator) Dr.Mitsuo Morozumi</td> </tr> <tr> <td>Dr.Azila Ahmad Sarkawi, Associate Professor International Islamic University, Malaysia</td> <td>Tepppei Matsuo Ureshino City, Japan</td> </tr> <tr> <td>Dr.Fumihiko Seta, Associate Professor The University of Tokyo, Japan</td> <td>Dr.Tomoyuki Tanaka, Associate Professor Kumamoto University, Japan</td> </tr> </tbody> </table>	Concurrent Session (1) 分科会(1) Taisho-Ya (Heian-no-Ma)/大正屋(平安の間)	Concurrent Session (2) 分科会(2) Taisho-Ya (Tancho-no-Ma)/大正屋(丹頂の間)	Human Settlement: ecology, environment, health and tourism	Development & Management infrastructure, transportation, urban design	(Moderator) Dr.Nobuo Mishima	(Moderator) Dr.Mitsuo Morozumi	Dr.Azila Ahmad Sarkawi, Associate Professor International Islamic University, Malaysia	Tepppei Matsuo Ureshino City, Japan	Dr.Fumihiko Seta, Associate Professor The University of Tokyo, Japan	Dr.Tomoyuki Tanaka, Associate Professor Kumamoto University, Japan
Concurrent Session (1) 分科会(1) Taisho-Ya (Heian-no-Ma)/大正屋(平安の間)	Concurrent Session (2) 分科会(2) Taisho-Ya (Tancho-no-Ma)/大正屋(丹頂の間)										
Human Settlement: ecology, environment, health and tourism	Development & Management infrastructure, transportation, urban design										
(Moderator) Dr.Nobuo Mishima	(Moderator) Dr.Mitsuo Morozumi										
Dr.Azila Ahmad Sarkawi, Associate Professor International Islamic University, Malaysia	Tepppei Matsuo Ureshino City, Japan										
Dr.Fumihiko Seta, Associate Professor The University of Tokyo, Japan	Dr.Tomoyuki Tanaka, Associate Professor Kumamoto University, Japan										
08:45-09:45											
09:50-10:50											
11:00-12:30											
12:30-13:15	LUNCH										
13:15-14:45											
15:00-16:00											
16:00-16:30	CLOSING CEREMONY										
DAY 3 <Wednesday June 3> 6月3日(水)											
09:00-14:00	Optional Tour 視察 Porcelain Ateliers and Kyusyu Ceramic Museum in Arita 九州陶磁文化館・チャイナオンザパーク < Meeting Place 集合場所 : Bus Center バスセンター>										

地域セミナーの記録

1. 基調講演 Keynote Speech



両角光男 熊本大学名誉教授

Dr. Mitsuo Morozum, Professor Emeritus, Kumamoto University

Planning Vital Cities and Regions Focusing on Unique Regional Resources

Building Characteristic Communities

Supported by Transport, Communication and Collaboration Networks

(Abstract)

It is an essential task of regional planning and development to preserve and utilize unique regional resources. But the goals and approaches of such a task may vary when comparing developing countries that face rapid population growth, food problems, poverty or hygiene problems, and developed countries that face a declining birthrate and an aging population, environmental problems, and divides between rural and urban regions. They also vary by the level of plans, from national level to local level.

This session, taking Japan as the case, discussed various examples of unique regional resources and the way of planning arrangements, illustrating four plans that are respectively proposed at four different levels of planning:

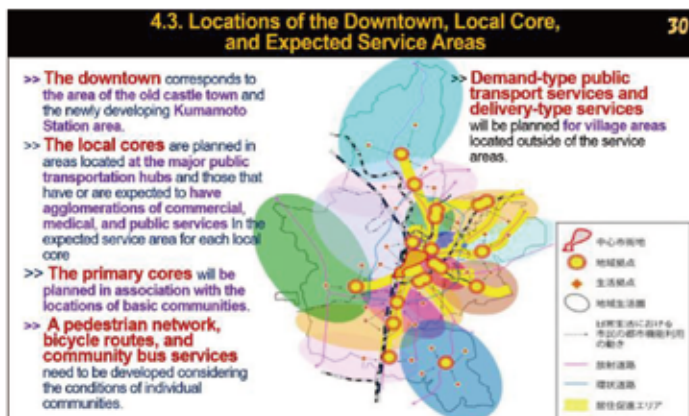
- 1) The Basic Policy for Overcoming Population Decline and Vitalizing Local Economy in Japan 2014, decided by the Prime Minister's Office.
- 2) The Regional Plan for the Kyushu Block 2015: A framework document, provided for asking public comments by the Kyushu Block Office of the Ministry of Land, Infrastructure, Transportation, and Tourism.
- 3) The Urban Planning Master Plan 2014 for the four hundred-year-old castle city of Kumamoto, decided by the city.
- 4) The Downtown Revitalization Plan 2013 for the four hundred-year-old castle city of Kumamoto, decided by the city.

Those four plans, though the goals and approaches of the use of unique regional resource are varied among them, all regarded that the regional resources and the development of transport, communication and collaboration network as keys for vitalizing socio-economic performances in the planning area.

In Japanese rural regions, there are many different unique regional resources left unutilized because of disadvantages they once faced, such as inaccessibility to metropolitan markets or the lack of market information, etc. The recent development of a high speed transport network has reduced their distance barrier to the metropolitan market, and has facilitated contact with global markets. With the use of ICT, the rural communities, by closely communicating with potential customers in distant areas who are interested in their products or services that fully utilize their unique resources, will be able to find their own markets in the virtual community. Some regional resources that were lost in the market competition will have a chance to survive as valuable products by organizing a local network of producers and consumers.

With the help of fresh ideas and broader views, and by discovering unique regional resources, converting them into products or services, spending time, energy, and extra money, and attaching rich stories and themes appealing to target markets, it will be possible to create new businesses with adequately sized markets for rural communities.

Rural communities have abundant time, space and attractive natural environments that metropolitan communities have lost. The recent report on the increasing numbers of young people in metropolitan communities who wish to move to rural communities is encouraging for the vitalization of rural regions.



1. はじめに

本日のテーマは「地域資源を活かした活力ある都市・地域の形成」です。地域固有の資源の活用は都市計画にとって必要不可欠です。しかし活用すべき地域資源やその活用方法は国や地域の経済社会環境によって異なります。今日は、人口減少と高齢化、さらには地方と大都市圏との格差を抱えた日本の都市・地域の計画が求める地域資源の活用についてお話しします。また都市や地域の計画といっても色々なレベルがありますので、先ず国のレベル、次に九州のレベル、3番目に熊本市を例に市のレベル、4番目に市の中心市街地のレベル、この4レベルの事例を通して話したいと思います。

2. 「まち・ひと・しごと創生」長期ビジョンとその総合戦略に見る地域資源の活用

最初に国の計画です。昨年末に「まち・ひと・しごと創生」長期ビジョン（以下、ビジョン）とその総合戦略（以下、総合戦略）が閣議決定されました。目的は、第一に日本に本格的な人口減少時代が到来したという国民の共通認識を図ること、第二に地方と国が取り組むべき対応策の策定と実践を加速することだとしています。

ビジョンによると日本の総人口は2008年をピークに減少が始まり、徐々に加速して2040年には毎年100万人ずつ減少するそうです。人口減少は地方の方が大都市より数十年早く始まりました。若者の大都市への流出が始まり、出生率低下も加わって出生数が大きく落ち込んだ。その結果、最近では出生数で死亡数を補えなくなっており、やがて大都市に供給する地方人口が枯渇するということです。大都市も出生率が低く死亡数を補えない。このまま日本全体で出生率が上がらないと、2080年には2010年の人口の半分以下となる可能性があるという警告をしています。

このような人口減少や高齢化は国内の生産と消費を縮小させ、日本経済にとって非常に大きな負担を生じます。また地方では地域に必要な活動の維持が益々難しくなる。これは日本の将来にとって大問題です。そこでビジョンは3つの緊急課題を挙げました。第一に東京一極集中を是正する。第二に地方にも若者が結婚し子育てしやすい社会経済環境をつくる。第三は地方が現在直面している課題を解決するということです。

緊急課題の解決の鍵となる地方創生について、ビジョンは次のような道筋を提示しました。先ず「地方に、地域資源を活かした、多様な地域社会を形成する」。また「広域的な交流・連携を刺激に、新たな視点で地域の活性を図る」。このようにして様々な取り組みが実践され「地方創生が実現すれば、地方が先行して若返ることができる」。その結果人口減少問題も緩和できるはずである。だから、2060年に一億人程度の人口の確保を目指して様々な取り組みを展開しよう。

「地域資源の活用」が最初に語られています。なぜ地域資源の活用が重要なのか。ビジョンでは、「日本は多様な気候風土のもと、それぞれの歴史・文化を形成し、多様な社会を作ってきたが、高度経済成長の過程でこのような多様性が失われた」と述べています。その背景には次のようなことがあったと私は考えています。我が国では高度経済

成長を実現するため、規格大量生産重視の経済社会システムを導入して品質向上と技術革新を進める一方、東京一極集中で管理する仕組みを強化し、世界との競争に打ち勝とうとした。その過程で地域の画一化や個性の喪失が進んだ。大都市圏から遠い地域は市場競争力を失い、地方の人口流出と経済社会の活力の低下、さらには人々の誇りの喪失を招き、それがまた人口流出を加速させるという悪循環に陥った。ここから先はビジョンにも書かれていますが、この悪循環を断つには、地方は固有の地域資源を発掘し、それを活用して差別化を図る。また人々の誇りを回復することが不可欠と思います。

総合戦略には、地方創生の基本目標を4つ掲げ、それぞれに関連する省庁横断的な基本戦略が多数示されていましたので簡単な表にまとめました。基本目標の第一は地方に安定した雇用をつくる。第二は地方に向けた新しい人の流れをつくる。第三は若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる。第四は時代にあった地域をつくり安全な暮らしを守るとともに地域と地域を連携する。このうち第四には、地方都市を核とする経済・生活圏の形成や、中山間地における「小さな拠点」の形成などを挙げています。都市・地域の計画との関わりが深い部分です。

昨年、「まち・ひと・しごと創生」本部（以下、本部）が設置され、長期ビジョン総合戦略が策定されました。次の段階では、嬉野市などの地方公共団体は本部と連携しながら、それぞれの地域の人口ビジョンと5カ年の地方版総合戦略を策定するよう求められています。また、本部によって承認された施策については、国が財政面、規制や制度などの運用面、さらには人材面の支援を行うとしています。

3. 九州広域圏地方計画に見る地域資源の活用

これは2016年に大臣決定する国土形成計画に組込む10カ年の計画（以下、地方計画）で、九州地方整備局を事務局に協議会を構成して骨子を作った段階です。計画対象は九州7県。総面積は4万2千平方キロ強で、国全体の11.2%、2015年時点の人口は1300万人強、国内人口の10.2%です。2007年時点の域内総生産額は凡そ43兆円で、国のGDPの8%です。これはベルギーとほぼ同規模、世界ランク20位程度の国家に相当します。つまり九州には中規模国と同程度の経済力があります。

次に地理的特性を見ますと、九州は大小多数の島々で構成されています。このうち本島では、福岡市、北九州市を始め、各県庁所在地が海岸線沿いにバランスのとれた距離感で位置しています。九州新幹線や高速道路網の延伸整備が進んでおり、域内都市の結合が一段と強まりつつあります。九州には多数の活火山や温泉、緑豊かで変化に富んだ自然景観、温暖な気候、多彩な歴史・物語などの地域資源にも恵まれています。

九州は、朝鮮半島や中国大陸とは非常に近く、東南アジアの国々とも近い。こうした地政学的背景にほり、古代から九州は文化・技術が外国から入ってくる際のゲートウェイ（玄関口）としての歴史がありました。仏教、キリスト教、鉄砲。何れも九州から日本に入りました。長崎の出島は江戸の鎖国期に唯一海外に開かれた港でした。

次に九州各県と福岡や大都市圏との間の人口移動収支を見ます。流入が流出を上回るのは福岡県のみ。もちろん福岡から県外に出る人も多数居ますが、九州各県からそれを上回る数の、主として若者が福岡県に流入しているようです。他の県はすべて人口流出超過です。九州全体としては人口流出と人口減少、そして高齢化が進んでいます。最後に7つの県庁所在都市と北九州市の人口変化ですが、北九州市と長崎市は人口減少が続いています。その他の都市は一応人口増加していますが、福岡市に比べ伸びはかなり小さい。因みに福岡市は最近の人口増加数、増加率共に政令都市の中でトップです。福岡市が九州からの人口流出を抑える最後のダムの役割を担っていると言えそうです。

地方計画では4つの課題を挙げています。第一に「伸びゆくアジアとの交流・連携の強化」。地政学的特性を活かしてアジアに対する日本の玄関口としての九州の機能を強化するという趣旨のようです。第二は「自立する九州圏の確立」。第三が「九州の資源、特徴を活かした産業の育成」。ここでも地域資源の活用が課題になっています。最後に「自然災害の脅威に対する備えと豊かな自然環境の保全」です。第二の「自立的な九州圏の確立」では、主要都市を高速交通網などで結ぶことで、経済・社会の連携と相乗効果を生み、九州全体の経済活動の高揚を図る。またそのことによって各都市の活力も高め、各県や九州からの人口流出を抑える、つまりダム効果を高めると述べています。

地方計画は4つの課題に対し、5つの戦略とそれぞれに関連する施策の要点を提示しています。5つの戦略は、第一に九州の持つ国際的ゲートウェイ機能の強化。第二に地場産業や自動車や素材関連など既に定着した基幹的産業の活性化。第三に生活圏や都市圏の機能向上と相互連携の強化。第四に自然環境や国土の保全と安心・安全な生活環境の確保。第五が九州の活力を創出する広域的交流連携の促進となっています。

先ず、第三の戦略の施策の要点を見ます。7つの県庁所在都市と北九州市を「基幹都市」、経済活動や生活サービスの拠点となる地方都市を「拠点都市」、さらには、中山間地の集落や都市内の住宅地で日常的な生活サービスを提供する「交流拠点」を想定し、経済活動やサービスの面で相互連携させる三層の圏域構造を形成するとしています。

最上層に県域を超えた「基幹都市連携圏」。基幹都市の高次都市機能の集積を進めると共に、高速交通網整備により相互連携と機能補完性を高めることにより、九州全体の経済社会活力を大きく成長させるとしています。第二層が、「都市自然交流圏」。基幹都市や拠点都市をコンパクト化しながら、それぞれの経済機能や生活サービス機能強化し、それら相互と生活拠点等を結ぶ交通や交流のネットワークを強化することで、各地域の経済活動や市民が享受する生活サービスを高度かす、さらには自然との接触を高めるとしています。第三層が、人々の日常生活を支える「基礎生活圏」。交流拠点と集落や都市内の住宅地との間の移動利便性を確保する。国の総合戦略では中山間地における人々の生産活動や国土保全を活動支える視点から、「小さな拠点」と呼ぶ交流拠点整備を重要事項としています。

順番が前後しますが、次に地方計画の第一の戦略に記載された「観光アイランド九州

をつくる」について紹介します。九州には豊富な自然資源があります。例えば、嬉野や武雄を始め九州には多数の温泉がある。でもそれだけでは不十分です。個性のかつ魅力的な地域資源を素材に、個人やグループがテーマを定めて地域を巡り歩く、地域の産業や生活文化を体験する、地域が育んできた歴史や物語を学ぶなど、知的関心と呼ぶような旅行プログラムの用意が大切です。地方の歴史や生活文化に関心を持つ海外観光客も増えているそうですし、九州新幹線の開通や海外からのクルーズ船の入港の増加などで、九州における外国人向け観光ビジネスも拡大しつつあります。

J R九州の観光特急も物語体験やテーマ型観光の好例です。特別な仕様で設計された列車で九州各地を回るわけですが、列車に乗ること自体を目的化し付加価値の高いビジネスに仕上げたのには感心します。最近、話題の地域資源には、今まさに世界遺産登録の準備が進んでいる明治の産業施設群があります。製鉄所や造船所、炭鉱など、明治日本の産業革命を支えたとされる産業施設群のうち9つが九州に立地しています。世界遺産登録は地域の国際的知名度を高める効果があります。これらを通して日本の歴史を体感的に学ぶような企画は魅力的な国際観光モデルになると期待されます。この他にも、九州各地にはキリスト教伝来の歴史を伝える教会群が数多くあり、来年度には新たな世界遺産に登録される可能性があると言われます。これも重要な地域資源です。

次に二番目の戦略で提示された「フードアイランド九州の形成」に話題を移します。これも地域固有の資源の活用が鍵を握ります。九州は国内でも農林漁業が盛んな地域で、生産額は全国の2割を占めます。特に肉用牛や海面養殖魚は4割を超えるそうです。地方計画は、現在でもイチゴ、はまち、牛肉、さらには木材の海外輸出が増えていることを踏まえて、今後、海外輸出に強化に力を入れるべきとしています。今後は九州としての統一的なブランド力を高め、それを活用する、九州全体で協力して海外で九州農水産物トレードフェアを開催するなど重要な取り組みとなるでしょう。それから、九州で国内初のイスラム圏向け食品のハラール認証企業が誕生し、追随する企業も増えています。ハラール食品ビジネスは一次産業の6次産業化の点からも期待したい分野です。

4. 第二次熊本市都市マスタープランに見る地域資源の活用

熊本市は九州の中央に位置しています。人口は73万4千人、都市圏人口は100万人強。元々400年前の城下町として拓かれました。熊本の近くには阿蘇九重国立公園があり雲仙天草国立公園などの美しい自然が広がっています。熊本市も市街地スプロールを経験しましたが、まだ比較的コンパクトさを保っています。百万都市圏の充実した都市サービス機能が備わっており、市民はこれらのサービスを身近に利用できます。その一方で、市街地の周囲の豊かな自然にも容易に触れられる。これは正にコンパクトな都市形態のお蔭です。また日常的に美味しい地下水を利用していること、新鮮な農水産物が豊富なことなども大きな魅力です。市中心部に目を向けます。熊本の城下町は400年前に加藤清正という戦国武将によって造られました。当時の城下町が現在の中心街

地の広がりに対応しており、これも都市計画の重要な資源となっています。

次に、熊本市の都市計画が直面した課題ですが、20世紀後半を通じて自家用車の保有が進み、「車社会」が誕生しました。このことは様々な問題を引き起こしました。市街地が拡散的に拡大して農地や自然を減少させ、道路整備やごみ収集など公共サービスコストを押し上げた。公共交通機関の利用者を減少させ、それがバス網やその運行頻度が縮小につながり、自家用車を利用できない高齢者や子供にとって、不便な環境を生み出したなどがあります。自家用車利用を前提としたショッピングセンターやスーパーマーケット、コンビニなども多数立地しました。直ちにこれ自体が問題だと言うわけではありませんが、身近にあった商店街が衰退し、自家用車を使わないと買い物が不便な地域が増え始めたのは問題です。

今紹介した一連のことが影響して、熊本市も中心市街地の空洞化問題が直面しています。市街地の郊外化が進む一方で、中心市街地に住む人、働く人が徐々に減り、商店街の通行人や売上も減少を続けている。空き店舗や空きビルが増え、建物を取り壊してコイン駐車場に変わった敷地も増えた。中心市街地は都市の顔とも言われますが、その活力の低下は熊本市の都市としての魅力や存在感の低下につながります。

熊本市がこれから直面しつつある大きな問題に、先のビジョンにもあった、人口減少と高齢化があります。2010年の市人口は73万4千人でした。社会保障人口問題研究所が公表した全国各都市の将来人口推計によると、2040年の熊本市人口は66万人程度と約1割の減少が見込まれています。中でも高齢人口が増加して福祉予算の増加が見込まれる一方で、経済活動を支える生産年齢人口が大きく減少することは、市の運営や地域の経済社会の活力維持が危ぶまれます。

こうした問題認識を踏まえて熊本市の都市計画策定に配慮すべき事項を整理したのが次の6項目です。①都市と農業・自然が共存する土地利用の実現、②公共交通や自転車を利用しやすい環境整備、③集約型都市（コンパクトシティ）への都市構造の転換、④都市サービス拠点の効果的配置と施設立地の誘導、⑤中心市街地の活性化、⑥市街地内で増加している空き家・空地の有効活用です。これらは先に紹介したビジョンや地方計画の考え方にも対応しています。

熊本市はこれらの配慮事項を踏まえて、第二次熊本市都市マスタープランを策定しました。機能面では、地方計画の基幹都市圏構想にも対応しますが、「アジアなど海外にも目を向けた広域交流拠点として発展させると同時に、熊本城や地下水などに代表される歴史・文化・自然資源を活かし、個性的でまとまりのある地域づくり、市民が心豊かに暮らせる都市づくりを進める」としています。また都市の物理的姿として、「豊かな水と緑、多様な都市サービスが支える活力ある多核連携都市」を掲げています。後者の実現方策として、第一に「中心市街地」、「地域生活拠点」、「生活拠点」と三段階の都市サービス拠点を設定し、必要な都市機能の立地を誘導し整備する。第二にそれらの拠点を結ぶ公共交通網や自転車道網整備など、自家用車に頼らなくても暮らせる交通環境を

整備する。第三に中心市街地や19の地域拠点、及び公共交通網の幹線沿いに「居住促進エリア」を指定して、集合住宅などの居住機能を誘導しながら市街地の集約再編を促すとしています。

先ほど説明したように既成市街地内部でも空き家が増え、商店街も衰退するなど、空洞化が始まっていること、今後、人口減少が進み既成市街地の空洞化が進むと懸念されます。市街地拡大を抑えるのはもとよりですが、既成市街地内部でも交通利便性の高い拠点にサービス機能や居住機能を集約することで、各拠点のサービス水準を維持向上させることで、徒歩や自転車、公共交通の利用により誰でもが高度なものから日常的なものまで必要なサービス受けられるようにしようという考え方です。人口密度が低い中山間地や農業地域についてはこうした考えでは対応できません。集落の機能維持の観点から、出張移動型のサービスや予約型の交通サービスなどで対応する必要があります。

既に中心市街地や19の地域拠点、さらにはそれらを含む居住促進エリアを設定しています。また、このマスタープランの実現に不可欠な公共交通網整備や緑地環境整備のマスタープランなどもできていますが、ここでの紹介は省略します。

5. 熊本市中心市街地活性化基本計画に見る地域資源の活用

これは今述べたマスタープランを実践する上で重要な役割を果たす計画ですが、これに先行し、2007年と2012年に5年間の計画を立て、事業を進めてきました。計画対象は特徴や役割が異なる4地区415haの区域です。地区の概要を紹介すると、最初が熊本城域に対応する熊本城地区。二番目が通町・桜町地区。旧城下町の武家地に対応しますが、現在は百万都市圏の商業業務文化サービス地区となっています。百貨店や都市圏交通の要が位置する二つの商業核と、それらを結んで逆L字型に並ぶ3つの商業アーケードが地区内の人の流れの骨格を作っています。三番目が新町・古町地区。旧城下の町人街に対応します。住民や事業者の転出でかつての賑わいは失われましたが、町割りが城下町の面影を伝える一方、明治大正建築も残されており、独特の生活文化を感じさせます。4番目が熊本市の陸の玄関口と位置付けられる熊本駅周辺地区。2011年の九州新幹線開業を契機に土地区画整理事業や再開発事業が進んでおり、10年程度の期間に街が大きく変わろうとしています。計画の目標は三つ。第一に人々が活発に交流し賑わうまちづくり、第二に、城下町の魅力あふれるまちづくり、第三が、誰でもが気軽に訪れることができるまちづくりです。特に第二の目標が地域資源の活用と関係します。

次に、この計画の目標を達成に向けた4つの戦略を紹介します。第一が現在ある2つの商業核とそれらを結ぶアーケード商店街の機能を強化し、商店街の賑わいを増幅、それによって広域から人々を呼び込む。第二が熊本城と城下町の資源を活かして文化的な魅力を高め、それを情報発信することで、都市圏はもとより広域からも観光客を呼び込む。第三が、熊本駅周辺を陸の玄関として整備すると共に、広域業務機能を整備し、県外からも人を呼び込む。第四が公共交通機関のサービスを向上させ、4つの地区相互間

の移動はもとより広域から各地区を訪ねやすくする。この4つです。

4つの戦略をどのように展開するか、これまでの実績や今後の計画を紹介します。第1の戦略に関して、2002年に中心市街地の北の商業核周辺で2つの再開発を完成し、続いて、そこに接続する商店街アーケード北部分の架け替えも終わりました。第一次計画では商店街アーケード南部分を架け替えに取り組みましたが、設計競技で設計者を選ぶ方法を取り、全国的に話題性を高めようとしていました。上部に太陽光発電パネルを設置し、そのエネルギーを使って明るい緑色のLEDを輝かせ、ドライミストを発生させて涼しい空間を作るなど、先進的な取り組みができました。

今述べた取り組みで北の商業核や連続するアーケード商店街の賑わいは増したのですが、西の商業核の競争力低下が進んでおり、現在は西の商業核の再開発事業を急いでいます。そこには現在バスターミナルと百貨店などの商業施設、ホテルやオフィスなどありますが、再開発では、既存の機能に加え、高層住宅や熊本市のMICE（国際会議場や大型ホールや展示場等の複合施設）を建設する計画です。施設のイメージ図をご覧ください。高さの異なる建物で構成されますが、それぞれの屋上を繋いで段状の屋上庭園を造り、熊本城を遠望できるようにする、またMICE最上階にある大型ホールのホワイエから屋上庭園に出てそのまま地上まで散歩しながら降りられるようするなど、新たな景観資源、魅力的な空間体験の場を作ろうとしています。現在は建設費を確認しながら詳細な設計を進めている段階ですが、4年後に完成の予定です。

第二の戦略に関連しては、先ず市が熊本城の復元事業に取り組みました。2008年に築城400年を記念して御殿大広間と呼ばれる城主の執務場所と付属の大台所が入った建物を復元しました。昔の図面を基に当時と同等の材料を使って建設したので、その豪華さには目を見張るものがあります。現在も、櫓や城壁など第二期の復元事業に取り組んでいます。

熊本城域の西や南に隣接する旧城下の町人街一体では、熊本市が住民グループを支援して、住民が自らまちの歴史資源を発掘し、それを地元住民はもとより来訪者に興味深く紹介する、さらにはアイデアを集めてそれらを使った町の活性化計画を作るなどしました。通り毎にそれぞれの歴史を伝える「街の案内板」や、街のガイドサービスや無料のトイレ休憩場所を提供する「街の駅」などが何箇所か誕生しました。若手建築家を中心に、現在も残る町家をリスト化しておき、可能なものから住宅、店舗、アトリエなどとして再生する取り組みや、町家に関心のある市民を招いて再生建物を見学したり、移住希望者と家主と移住希望者との出会いを助けたりする企画も進んでいます。

最後に熊本駅周辺地区のゲートウェイ機能を向上させるという第三の戦略に関連した取り組みです。第四の公共交通サービスの強化も含まれています。九州新幹線開通を契機に土地区画整理事業や再開発事業、駅前広場整備事業など多数の事業が実施されており、今後もまだ続く予定です。市電の軌道を道路の端に寄せて歩道から乗れるようにする事業や国の合同庁舎の移転整備事業も終わりました。

時間が無くなりましたので個々の事業の説明は省きますが、一点だけお話ししたいことがあります。多数の事業が実現すれば、それだけでも地区の環境は大きく変わりますが、魅力的な公共空間整備や地区としての魅力創出という点では不十分です。2007年に熊本県と熊本市が協働して都市デザイン専門家会議(以下、専門家会議)を作りました。都市や建築やサインのデザイン、バリアフリーデザインの専門家が集まった会議です。民間敷地も道路に連なる外周部は、視覚的にも出入りと言う点でも公共性を帯びています。そこで専門家会議では、道路空間とそこに連なる民間敷地内の公共性が高い空間を一体的に演出し整備するという方針の下、「公共空間のデザインガイドライン」を作成し公表しました。道路毎にデザインテーマと公共空間のデザイン方針を提示し、個々の施設設計の際の参考資料をまとめたものです。専門家会議メンバーは民間や公的機関による個別事業が計画される毎に、ガイドラインに基づいて事業担当者と設計や施工内容を粘り強く協議し、地区としての一体性や連続性を保つよう調整を続けています。

駅周辺地区の整備はまだ半ばですが、専門家会議の活動によって、道路空間から民間敷地内にまで緑豊かで安全快適な散策や憩いの場が広がっています。地区共通のテーマや物語を描きながら個々のデザインを連携させると、街並みや来訪者の空間体験という文化的な価値が付加され、新たな地域資源になるという好事例ができたと思います。

6. 終わりに

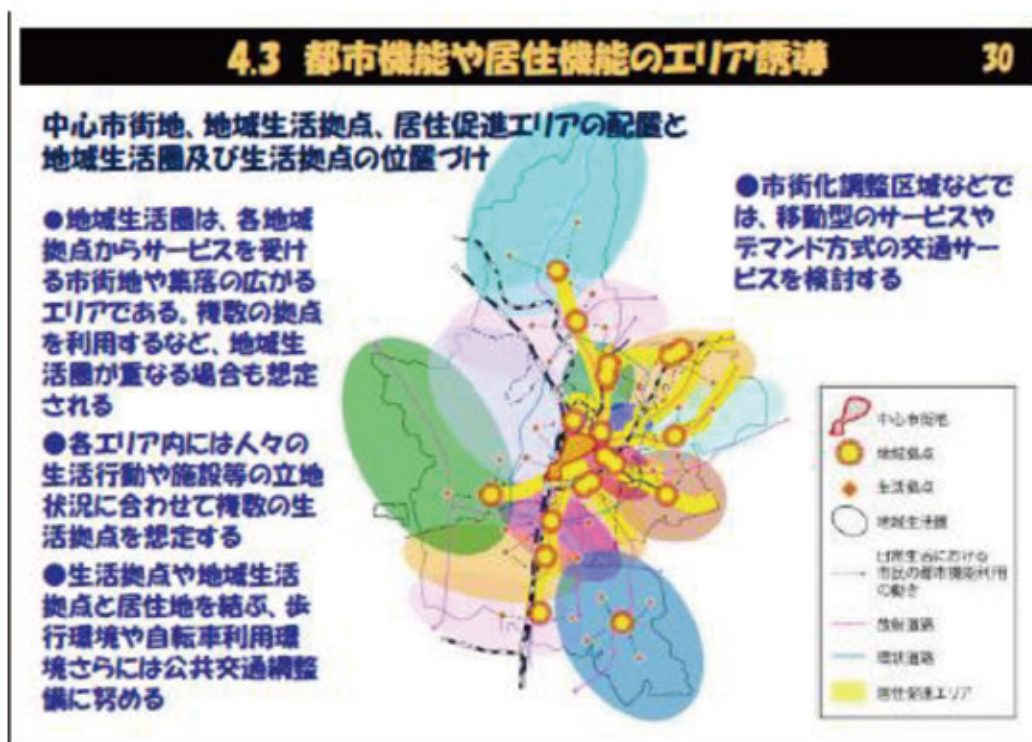
4レベルの計画を通して地域資源とその活用方策を見てきました。対象やその活用方法は異なりましたが、何れの段階の計画においても地域活性化の鍵として地域資源の発掘とその活用を挙げていました。

地方には地域それぞれに固有な資源がまだ多く眠っています。この中には、かつて大都市へのアクセスが悪かった、あるいは情報が不足していたなどの制約から商業化されなかった資源も少なくありません。最近では高速交通網やICTの発達で距離的障害は減りました。地方と大都市、地方と世界の距離は縮まり、地方の各地域もグローバルなマーケットを相手にビジネスを展開できるようになりました。特にICTは地域と、その資源を活用した商品やサービスに関心をもつ人々を直接つなげ、地理的空間とは次元の異なる仮想空間の中にもマーケットを生み出そうとしています。生産者と地元消費者との間で独自の域内ネットワークを作ることで、大都市相手では競争力が無かった産物も、みんなが喜ぶ商品になったという事例も多数報告されています。EAROPHのDardak会長のご挨拶の中で「道の駅」が紹介されましたが、これも成功事例の一つです。

大事なことは、知恵を働かせて独自の資源を洗い出し、手間とヒマ、さらには多少の費用は惜しまずにその資源を個性的な商品に仕上げる。地域が培ってきた生活文化や物語をそこに加える。こうした努力で地域にとっては十分な規模の価値あるビジネスが生まれる、そうした可能性は十分あると思います。また地方には大都市が失った時間や空間のゆとりや恵まれた自然環境があります。新しい挑戦の機会も大都市より多い。そう

した観点から、地方に移り住みたいという大都市の若者が増えているという調査結果も示されており、これは地方にとって大きな力になると思います。

最後は駆け足になりましたが、ご清聴有難うございました。



2. パネルディスカッション Panel Discussion

"Planning and Housing Focused on Local Resources" 地域資源を生かした活力ある都市・住宅の形成

パネリスト Panelist

三井所清典 日本建築士会連合会会長

Dr. Kiyonori Miisho, President, Japan Federation of Architects

姫野由香 大分大学工学部助教

Dr. Yuka Himeno, Research Associate, Ohita University

Mdm. Norliza Hashim, Secretary General, EAROPH Headquarter, Malaysia

Ms. Donnell Davis, City planner, EAROPH Australia

谷口太郎 嬉野市長

Mr. Taichiro Taniguchi Mayor of Ureshino City

モデレーター Moderator

小浪博英 EAROPH 理事 国土政策研究会専務理事

Dr. Hirohide Konami EAROPH EXCO member

基調講演に続いてパネルディスカッションが嬉野市社会文化会館・リパティで開催された。パネリストは日本建築士会連合会会長三井所清典、大分大学工学部福祉環境工学科姫野由香、EAROPH 事務総長 Norliza Hashim、EAROPH オーストラリア Donnell Davis、嬉野市長谷口太郎の各氏で、コーディネーターは EAROPH Japan の小浪博英であった。その概要を紹介する。

谷口：嬉野市は大体 20 年に 1 回大洪水にあっていたので、戦前から積極的にまちづくりを進めてきた。広い道路を整備した時はその新しい道路の上で、みんなでラジオ体操をやったこともある。それらの様子は写真やアルバムにも残っている(アルバムの写真紹介)。現在は新幹線駅周辺の整備が中心で、人にやさしいまちづくりの核となる医療センターの立地が既に決まっており、地域連携の交通・広域拠点となることが期待されている。また、駅前のデザインには最大限の注意を払っている。

三井所：1977 年、有田のまちづくりをお手伝いした時、この 360 年の伝統をまちづくりにどう生かすかについて腐心した。有田の町にふさわしい美術館の設計、1985 年の伝統的建築物群の指定、一方通行の導入、電柱の地下化など、やれることは何でもやっている。次に、中越地震の復興についてだけど、福島県から富山県にかけての、積雪が 3m を超す豪雪地帯なので、復興住宅ひとつとっても雪下ろしの要らない屋根にしようとか、斜面を上手に使った設計にしようとかの工夫をした。自己負担もなるべく 500 万円以下で良いように随所に工夫がしてある。



図1 自然にマッチした復興住宅のイメージ

困ったことは山古志で地元の公務店が既存建物の修復に手一杯で、復興住宅まで手がまわらないという。伝統工法でやりたいのでどうしても地元の工務店にやってもらいたいのに、その人がいない。仕方ないので長岡市まで出かけて工務店を探し、やっとなど

かなった。日頃から在来工法に精通した工務店を育てておくことの必要性を痛感した次第。奈良県では十津川村での水害があった。ここでも在来工法による地域の景観とマッチした設計とした。いずれの場合も地域の自然と伝統に調和した設計について最大限の工夫を凝らしてきた。

Donnell Davis : オーストラリア東海岸にはグレートバリアリーフを含む南北 3000km にも及ぶ海岸線があり、2000 年のシドニーオリンピックに始まって数多くのスポーツイベントも開催されている。内陸の方ではアデレードからウルルを通してダーウィンまでの **Ghan Train** もあり、それらの観光に関連するインフラ整備も進んでいる。問題はそれらのインフラの利活用と維持管理である。大企業はその時だけ熱心だけど終わってしまうと人員も引き上げて素知らぬ顔。人口の都市集中とも相まって、地方都市での人材活用と財政負担の軽減が今求められている。また、地球温暖化への対応、環境保全にも配慮しなくてはなりません。

姫野 : 私は大分のまちづくりについて紹介したいと思います。今回のセミナーは地域資源の活用ということですが、そのポイントとしての観光があると思います。観光とは地域の文化・特徴・光の部分を育むものであり、文化財や自然、山と海、例えば別府の家族経営でやっている湯治宿などはその湯煙立ちこめるさまがまさに地域資源だと思います。嬉野に来てみましたら、何と、湯煙広場があるではないですか。これは別府のライバルです。ところで、別府の湯の華小屋。もしこれがなければその一帯はただの住宅地です。これを守るためにはルールづくり、守られてきたローカルルールとその地域の意思が必要なのです。文化財保護法、景観法など行政との連携もありますが、地域の伝統をつないでゆくためには今の消費者に受け入れさせるためのお化粧品、地域の組織づくりと伝承。湯治には行かないけど地獄釜で料理を楽しむなど、新しい発想が必要です。文化財のガイドや町歩きの機会に、学生も職人も一緒になって新しい発見をし、新しい風景を作っていくことが必要です。

INITIATIVE TO PROTECT THE ENVIRONMENT



図2 マレーシアの自然保全戦略

Norliza Hashim : マレーシアは約 33 万平方キロメートルの国土に約 3000 万人が住んでおり、国土の約 60%は森林です。海岸線は 4,675km に及んでいます。観光産業による外貨獲得額は 2014 年で約 650 億マレーシアリンギット (約 2 兆円)、貿易収支で見ると 3 番目の外貨獲得手段となっています。観光については歴史、エコ、ホームステイ、スポーツ、海洋と島嶼、会議と展覧会、飲食、ゴルフ、買物、健康などの分野の観光を重点的に進めております。今後においては世界遺産はもちろん、各地の自然遺産や文化遺産などを国と州とが連携して保全することが大切だと思っています。

以上の発表の後、パネリスト同志の意見交換と会場からの質問を予定していたが、大幅に時間を経過してしまい、その時間がなくなってしまった。そのため、パネリストから本日のシンポジウムで強く印象に残った点について 2~3、指摘していただくこととした。その前に小浪から三井所さんに対して、各地での復興住宅建設における建築確認での問題を伺ったところ、地域別に気候などの特性があるので、地域別の基準があるといいと思う旨、提案があった。各人の発言はおおむね次の通りであった。

谷口 : 三井所さんのお話で嬉野でも大工の棟梁と住民とが根気よく話し合っ設計を決めていること、次は姫野先生のお話で、別府石を文化的景観として道端石の環境などの工夫があること、また、共同管理で地域管理を行うこと。農事組合という制度もありますが、まだうまく機能しているとは思えません。この 3 点がとても参考になりました。

Norliza Hashim : 今回のセミナーで各地での local solution (地域ごとの工夫) を聞くことができたのがとても面白かった。

Donnell Davis : 交通や地域保全などいろいろな発表を聞いて、それぞれの地域の文化や構想を知ることができた。これらを参考にして次世代に繋いでゆくことが大切だと思う。

姫野 : 嬉野市へのヒントをひとつ。長崎にはシュガー街道があってスイーツを中心に女性の興味を引いている。嬉野ではお茶畑の風景をはじめ多くの資源があるのに、ただあるだけ。磨いていない。高齢者と若者などの目的とニーズをしっかりと把握して再編したらどうかと思います。

三井所 : オーストラリアの砂漠ツーリズムのお話、マレーシアの森林活用、このようなお話を聞きながら、業と住まいをつなげて命の問題を考えないといけないなどおもいました。姫野先生のお話はこれからも学生に問いかけていきたいと思っています。



図3 話し合っイメージ作り

以上でパネルディスカッションは終わりました。

3. 歓迎レセプション

Welcome Reception

Welcome Reception was held at Wataya-Besso, Japanese style hotel, with the appearance of Japanese traditional drum circle of Ureshino High School students, and the local dancing group of "Tosei Kai" showing traditional Japanese dances. EAROPH participants enjoyed not only drum and dancing but also taking pictures with the Kimono dancers.

歓迎レセプションは、開会式前に地元嬉野高等学校和太鼓部による「嬉昇伝心太鼓（きしょうでんしんだいこ）」の賑やかな演奏が15分程度あり、盛り上がったところで谷口太一郎市長、佐賀県和泉県土づくり本部長、都市計画協会矢島国際委員長、EAROPHのNorliza Hashim事務総長の挨拶が続き、乾杯したあと、地元の藤生会の皆様が舞台上で日本舞踊を踊る中懇親に入った。

会場は和多屋別荘で、日本舞踊終了後壇上から降りてきて、懇親会に加わって下さった和服姿の藤生会の皆さんと外国人とが満面の笑みで記念写真に収まっていた。進行はオーストラリアのDonnel Davisさんが頑張って下さり、それに乗せられた各国は大変に喜んで、またその間、舞台では岩永ゆりさんとそのグループによるバイオリンの演奏もあって、かつのEAROPHのどの会合にも負けない盛り上がりであった。



4. 分科会 Sub-Sessions

	Concurrent Session (1) 分科会(1) Taisho-Ya (Heian-no-Ma)/大正屋(平安の間)	Concurrent Session (2) 分科会(2) Taisho-Ya (Tancho-no-Ma)/大正屋(丹頂の間)
	Human Settlement: ecology, environment, health and tourism	Development & Management infrastructure, transportation, urban design
08:45-	(Moderator) Dr.Nobuo Mishima	(Moderator) Dr.Mitsuo Morozumi
09:45	Dr.Azila Ahmad Sarkawi, Associate Professor International Islamic University, Malaysia	Teppei Matsuo Ureshiino City, Japan
	Dr.Fumihiko Seta, Associate Professor The University of Tokyo, Japan	Dr.Tomoyuki Tanaka, Associate Professor Kumamoto University, Japan
09:50-	(Moderator) Dr.Takafumi Arima	(Moderator) Dr.Akihiko Higuchi
10:50	Novi Sunu Sri Giriwati Kumamoto University, Japan	Huang PengXiang Zhejiang Gongshang University, China
	Tanachawengsakul Tanaporn Saga University, Japan	Chen Chen Kumamoto University, Japan
11:00-	(Moderator) Dr.Eiko Nishi	(Moderator) Dr.Seiji Nishioka
12:30	Srinurak Nattasit Saga University, Japan	Akane Matsumae, Professor Saga University, Japan
	Anai Shoichiro IAO Takeda Architects Associtaes Co.,Ltd.	Dr.Yasuhiro Kusano Institute of Policy Research, Kumamoto City, Japan
	Hiroko Sakurai Japan China Korea Tourism Cooperative Organization	Myo Gyu Oita University, Japan
12:30- 13:15	LUNCH	
13:15-	(Moderator) Pinki Pangestu	(Moderator) Norliza Hashim
14:45	Dr.Jae IK Kim, Professor Keimyung University, Korea	Donnell Davis EAROPH Australia
	Ir. Hj Zafrul Fazry Bin Mohad Fauzi Ampang Jaya Municipal Council, Malaysia	Yohei Sadohara Kyushu University, Japan
	Yuji Kanaya Information Center for Building Administration, Japan	Fei QinFang Zhejiang Gongshang University, China
15:00-	(Moderator) Dr.Hajime Sabo	(Moderator) Dr.Hirohide Konami
16:00	Carlo Fundador B. Marudo EAROPH Phillippines	Kyoichi Nakamura ICHIU Architectural Concepts and Design
	Liu Haiqiang Saga University, Japan	Lu Weite Zhejiang Sci-Tech University, China

5. 閉会式

Closing Ceremony

Closing ceremony was held at Taisho-ya, Japanese style hotel, succeeding the sub-sessions. Mayor Taniguchi mentioned that he and Ureshino City are so happy by hosting the successful EAROPH Regional Seminar and expressed the gratitude to all EAROPH members, students and supported governments and organizations. Mdm. Norliza Hashim said that it is great to have this successful seminar in such a small but traditional city, Ureshino. We promised to meet again in Kota-Kinabalu, Malaysia, next year.



6. ツアー

After Seminar Tour

After seminar tour was prepared on third day, June 3. About 20 participants enjoyed the visit to the Kyushu Ceramic Museum and "The China on the Park" managed by Fukagawa Pottery. We could see the huge water jug made of ceramic presented in Paris World Exhibition in 1900 and given the gold medal.



あとがき

Afterword

(E A R O P H地域セミナー2015嬉野)

(1) 嬉野市の谷口市長が2013年11月マレーシアに直接赴かれ、E A R O P H地域セミナー2015招致のプレゼンテーションをされたことが、今回セミナーの出発点となるエポックであった。嬉野招致は各国から熱烈に歓迎されたが、その時点では過去のE A R O P H会議日本開催に関した経験者たちの心の片隅に嬉野開催の前途を心配する気持ちが無かったとは言えないだろう。しかし「杞憂」とはこのことであった！！

(2) セミナー終了にあたって海外参加者からは、「このような小さな町で大都市に負けない心に残る会議が行われたことを評価し、感謝している。」などのコメントがあった。国際会議と言うとその企画・運営を担う専門会社に相当部分を委託して行われる事例も多い中、今回のセミナーは、実行委員会のメンバー、市役所職員その他関係者による文字どおり「手造り」の開催であったし、現地視察、レセプションなどは、佐賀・嬉野の豊かな地域資産を活用したものであった。また、会議ならびにレセプションに地元高校生の出席・出演があったことは地域の若い力を参加者に印象づけた。

(3) 閉会式にあたって、『開会から閉会まで、おもてなしの心と論文のレベルの高さなど過去20年に各国で開催されたE A R O P H会議のうち最高に近い出来栄であった(小浪E A R O P H理事)』との総括があったことは、関係者全員の熱意と努力、それに佐賀・嬉野という風土のなせる技だったのであろう。

実行委員会副会長 : 矢島 隆

資 料

- 1) 開催までの足取り
- 2) 開催組織
- 3) 会議を終えて
- 4) 記録写真
- 5) 参加者・協賛者名簿

開催までの足取り

嬉野市では2009年頃から国際的な行事を模索。EAROPH JAPANの佐保氏に開催の意向を示したところ、EAROPHという国際会議を打診され開催に向けスタートを切ることになった。

2013年にはマレーシアのジョホールバルでの地域セミナー開催時に2015年の地域セミナー開催地として嬉野市長が立候補を表明。理事会において満場一致で了承され、嬉野市での開催が内定した。

これを受け2013年12月にJASOPH会長の矢島隆氏を中心としたEAROPH嬉野セミナー準備検討チームを立ち上げる。

2014年4月JASOPHは都市計画協会国際委員会に引き継がれることになったが、この委員会に「2015EAROPH佐賀・嬉野地域セミナーPT」を設置し、開催に向けた具体的な検討に入っていくこととなった。

事業費を約900万円、参加総数を200名と見込む。全体テーマを「Focus on Local Resources ; Planning and Housing」、サブテーマを「Human Settlement ; Ecology and Environment」「Healthful Human Life and Tourism」「Infrastructure and Development」の3テーマとした。

2014年8月にはEAROPH世界大会がインドネシアのジャカルタで開催されたが、ここで2015年の地域セミナーを嬉野市で開催することが正式に決定された。

本セミナー名称を「EAROPH2015 Regional Seminar in JAPAN(Ureshino/Saga)としてEAROPH本部に登録した。

開催組織

実行委員会の設置

実行委員会の設置は2014年9月2日付けで組織委員会と共に設置した。

〈組織委員会〉

会長	山口 祥義	佐賀県知事
副会長	谷口 太一郎	嬉野市長
	小川 忠男	都市計画協会会長
委員	小関 正彦	国土交通省 都市局長
	橋本 公博	国土交通省 住宅局長
	金尾 健司	国土交通省 九州地方整備局長
	小松 政	佐賀県都市計画協会会長

〈実行委員会〉

会長	谷口 太一郎	嬉野市長
副会長	矢島 隆	都市計画協会国際委員会委員長
	小滝 晃	九州地方整備局 副局長
委員	小浪 博英	国土政策研究会専務理事
	佐保 肇	佐保計画工房代表
	杉山 雅英	都市計画協会業務執行理事
	矢野 進一	都市計画協会上席調査・研究員
	小笠原憲一	公共用地補償機構理事長
	麓 裕樹	九州地方整備局 建政部長
	黒岩 春地	佐賀県 国際・観光部長
	副島 良彦	佐賀県 県土づくり本部長
	中島 庸二	嬉野市副市長
	池田 榮一	嬉野温泉観光協会会長
監事	山口 久義	嬉野市 会計管理者
	楯 浩司	都市計画協会事務局長
事務局	嬉野市役所	(企画部企画政策課)
論文委員	有馬 隆文	九州大学大学院人間環境学研究院准教授
	小浪 博英	国土政策研究会専務理事
	佐保 肇	佐保計画工房代表
	西 英子	熊本県立大学環境共生学部准教授
	樋口 明彦	九州大学大学院工学研究院准教授
	三島 伸雄	佐賀大学大学院工学系研究科教授
	両角 光男	熊本大学理事・副学長

会議を終えて

(小浪博英)

最近、我が国において開催された **EAROPH** 国際会議は、2003 年地域セミナーが長崎県大島町で、2008 世界会議が兵庫県の姫路市と淡路市で、2015 年地域セミナーが佐賀県嬉野市で開催された。これらを比較して今回の嬉野会議は、日本旅館と温泉という、極めて和風色が強く、英語やハラルフードの心配があったが、終わってみれば杞憂に過ぎなかった。関係者の努力に敬意を表する。

参加国が 8ヶ国 1 地域であり、シンガポール、バングラデッシュ、モンゴル、インドなどが不参加であったのが残念であるが、できれば個人的な知り合いにも誘いをかけるべきであったと反省している。また、アフリカからの参加申し込みについて、**EAROPH** 本部から、「ビザを申請するための招待状を要求されても、本当に会議に参加するのか分からない場合は慎重にすべきである」との助言をいただいた。日本への入国のためだけに利用されることがあるらしい。そのためのチェックの方法が良く分からないが、「**EAROPH** または **IFHP** の会員であること、あるいは会員の紹介があること」とすれば多少は危険を回避できるかもしれない。事前に会員名簿を把握しておく必要がある。

論文については様式の統一など事前の準備が十分でなく、募集期間も会議開催の半年前という短期間であったので、事前配布はアブストラクトのみになった。本論文は事後の印刷と HP 掲載ということであるが、編集者が大変に苦労をした。これは国際会議の恒ではあるが、もっと早くから体制を整えるべきであった。

ひとつ残念だったのは **EXCO** という理事会と論文発表分科会の時間が 2 日目の午前に重複させざるを得なかったことである。**EXCO** は開会前の 5 月 30 日午後に開催することも検討すべきであった。

以上、多少の反省はあるものの、総じて大成功であった。

EAROPH Regional Seminar 2015

会議を終えて

(佐保肇)

嬉野地域セミナーは嬉野市長の誘致申出により開催へ向けての準備が始まった。そして、嬉野市から 2013 年のマレーシアでの地域セミナーと 2014 年のインドネシアでの世界会議にそれぞれ数名の担当者が派遣された。その体験を踏まえて、セミナー自体は滞りなく実施され、加えて嬉野市担当者による新幹線新駅周辺の整備を主題とした論文発表もなされた。

このように人口 3 万人の嬉野市が積極的に国際交流活動に参画したことは我が国における EAROPH 活動として貴重な実績である。これからはこの活動を持続させ、広げていくことが課題である。都市や生活環境は中央政府よりはむしろ地方政府が主体的に取り組むべき問題であり、国際的な情報交流活動においても地方政府の積極性が望まれる。

今日では小さな自治体にとっても国際的な活動は珍しくない。観光客誘致や地方製品の売込み等のために、首長はじめ自治体関係者の外国訪問は日常化している。しかし、その多くは相互に情報を交換し、あるテーマで議論しあう真の意味での交流活動ではないと推察される。一方 EAROPH では双方向の国際交流活動の一つの役割に掲げている。このような EAROPH の活動に自治体が主体的に参画することによって、自治体の都市や生活環境についての情報領域が広まり、内容は深まり、その意義は大変大きいと考えられる。

今回の嬉野地域セミナーは自治体が国際交流活動を具体的に演じた貴重な事例であり、これを単なる一回きりの行事として終わらせず、継続的に発展させていくことが大切である。そのためには嬉野地域セミナーの経験とそれから得た教訓を広く発信していくことが強く求められる。我が国には嬉野のように温泉と固有の地場産業に恵まれた地域が沢山存在する。特にアセアンの人々に取っては珍しい雪深い地域や個性豊かなお祭り等極めて多様性に富んでいる。この個性を活かし、EAROPH の場を活用し、地方自治体の国際交流の機会が今後益々増えることを期待する。

会議を終えて

セミナー実行委員会事務局

(嬉野市企画政策課)

当市では初めてとなる国際会議の開催でしたが、EAROPH Japan の皆様のご協力を頂きながら無事終了することができました。まずは御礼を申し上げます。

さて、近年嬉野市には多くの外国人観光客がお越しになります。ただ今回のような国際的なセミナーの開催は経験がなかったので最初はどうかと心配していましたが、これまで培った経験を生かしながら何とか対応できました。また地方都市での開催に達成感も得たところですので。それではセミナーを終えて何点か気づきがあったことと参加者から頂いたご意見を述べたいと思います。

まず英語表記の充実と英語をマスターしておくことが重要と感じました。また、今後このような国際会議を誘致するには市職員のスキルアップも課題になると感じたところです。

次に、より多くの参加者を募る上でも国も主催者として参画はできなかったのかという点と、これから先の日本での開催について、今回も決して少なくない自治体負担が発生することになりましたが、専門的な会議として開催の名乗りがあるかどうか。そしてEAROPH Japan の組織体制（後継者確保含め）と財政的なことも併せて検討が必要ではないでしょうか。

次に会議に参加してのご意見を頂きましたので報告いたします。まず1日目の全体会では講演の内容はどれも素晴らしかったが、聴講者のほとんどが日本人なので日本語表記のパワーポイント資料の配布をしておけば内容の理解が促進され、また質問も出やすかったのではないかと。また通訳関係では、入れ替わるタイミングが上手な人は非常に聴きやすく事前の打合せの重要性を感じた。同時通訳はタイムラグが限りなく少なくスムーズだったので非常に分かりやすかった。などの意見があった半面、基調講演が長すぎた。パネルディスカッションの討論をもう少し聞きたかった。また、英語での講演で日本語に通訳されたが、地域の方々も参加されるということであれば逆の方がよかった。などの意見もありました。

2日目の分科会では、会場を2分科会に分けていた関係もあり、会場ごとの発表時間や内容を記した案内資料の配布と会場の詳しい案内表示。また、他会場の実施状況を会場の端にでもライブ中継したら（無声音でよい）よかった。との意見がありました。

次に論文発表の関係では、時間配分について内容省略を余儀なくされた発表者があったことは残念であった。との意見もありました。

その他としては、事前案内（資料）の分科会のテーマ・内容が英語表記で分かりにくかった。今回のセミナーを関係者へ紹介したが、参加費が高いとの声があった。など今後の開催に参考となる多くの御意見を頂きました。

以上開催事務局としての感想を述べましたが、準備から最終の報告書作成まで多くの方々にご支援と御協力を頂きましたことに対し厚く御礼を申し上げます。

記録写真



登録受付会場の市公会堂



受付の状況。

話も弾みます。



施設見学へ出発



伝統的釜炒り茶製造体験。楽しそうです。



ここは最新式の茶製造機械です。

嬉野茶を使った茶染め体験。苦心しながらでも皆さんよくできました。



全体会の会場「リパティ」



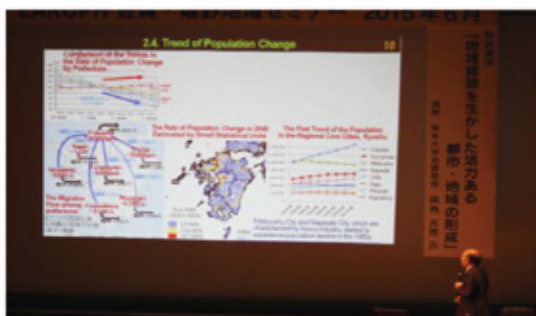
ロビー



江戸時代行商に使われていた茶箱



開会前のミーティング



基調講演には塩田工業高校の生徒さんも参加されました



嬉野のお茶と紅茶と和菓子で ”おもてなし”



パネルディスカッションには5名の方が登壇



記念品贈呈と閉会のご挨拶

歓迎レセプション



総合司会是小浪さん



嬉野高校の和太鼓演奏には大歓声



佐賀県産の食材による各種料理



参加者一覧

Soo Young Park	(EAROPH 名誉会長：韓国)
Achmad Hermanto Dardak	(EAROPH 会長：インドネシア)
Norliza Hashim	(EAROPH 事務総長：マレーシア)
Vincent M. Patrick	(EAROPH 事務局：マレーシア)
Bemardus Djonoputro	(EAROPH 会員：インドネシア)
Donnell Davis	(EAROPH 会員：オーストラリア)
Miseon Park	(EAROPH 会員：韓国)
Tam Weng Wah	(EAROPH 会員：マレーシア)
Hamzah Bin Tajuddin	(EAROPH 会員：マレーシア)
Noranzam Bin Alias	(EAROPH 会員：マレーシア)
Abdul Manaf Bin Kasnan	(EAROPH 会員：マレーシア)
Jeevasuthan George	(EAROPH 会員：マレーシア)
Carlo Fundador B. Marudo	(EAROPH 会員：フィリピン)
Alvin Chu	(EAROPH 会員：香港)
William Chan	(EAROPH 会員：香港)
板倉 英則	(EAROPH 会員)
矢島 隆	(EAROPH 会員)
小浪博英	(EAROPH 会員)
佐保 肇	(EAROPH 会員)
杉山雅英	(EAROPH 会員)
矢野進一	(EAROPH 会員)
小笠原憲一	(EAROPH 会員)
金谷勇治	(EAROPH 会員)
奈良吉倫	(EAROPH 会員)
Iman Soedradjat	(インドネシア)
Tata Maskan	(インドネシア)
Nurrahma Tresani	(インドネシア)
Raiskandar	(インドネシア)
Kamal Kusmanto	(インドネシア)
Annarita Rosliana Siantuni	(インドネシア)
Endra Saleh Atmawidjaja	(インドネシア)
Hetty Adriasih	(インドネシア)
Marian Eileen F. Marudo	(フィリピン)
Edric Marco C. Florentino	(フィリピン)
Hyuna Lee	(韓国)

小関	正彦	(国土交通省都市局長)
副島	良彦	(佐賀県副知事)
深澤	良信	(国連ハビタト福岡本部)
早田	明生	(諫早市役所)
清武	裕子	(佐賀県観光連盟)
後藤	忍	(佐賀県観光連盟)
松本	卓也	(長崎県波佐見町役場)
田口	好秋	(嬉野市議会)
梶原	睦也	(嬉野市議会)
芦塚	典子	(嬉野市議会)
生田	健児	(嬉野市議会)
大島	恒典	(嬉野市議会)
織田	菊男	(嬉野市議会)
川内	聖二	(嬉野市議会)
田中	平一郎	(嬉野市議会)
田中	政司	(嬉野市議会)
辻	浩一	(嬉野市議会)
西村	信夫	(嬉野市議会)
増田	朝子	(嬉野市議会)
宮崎	良平	(嬉野市議会)
森田	明彦	(嬉野市議会)
山口	要	(嬉野市議会)
山口	忠孝	(嬉野市議会)
山口	政人	(嬉野市議会)
山下	芳郎	(嬉野市議会)
本間	里見	(熊本大学)
下田	保彦	(三重県庁)
三宅	和典	(玉野総合コンサルタント (株))
北原	敏郎	(玉野総合コンサルタント (株))
田部	井伸夫	(玉野総合コンサルタント (株))
森高	司郎	(玉野総合コンサルタント (株))
柳	慶明	(玉野総合コンサルタント (株))
倉地	哲也	(玉野総合コンサルタント (株))
石川	誠一	(玉野総合コンサルタント (株))
福満	孝博	(玉野総合コンサルタント (株))
溝下	重成	(玉野総合コンサルタント (株))
田中	和生	(朝日テクノ (株))
古川	慎治	(武雄市役所)
山口	洋	(武雄市役所)
田中	純夫	(武雄市役所)
清水	耕一郎	((株) アルセツド建築研究所)
安部	竜介	(長崎市役所)
佐保	龍子	(佐保計画工房)

本田 哲子 ((公財) 都市計画協会)
榎本 晶夫 ((一財) 小林国際都市政策研究財団)
稲永 岳洋 (九州新幹線(西九州)三坂トンネル他 清水・青木あすなろ・唐津土建JV)
白井 隆裕 (九州新幹線(西九州)三坂トンネル他 清水・青木あすなろ・唐津土建JV)
山下 雄平 (参議院議員)
麻生隆一郎 (福岡資麿参議院秘書)
諸岡 義隆 (大串博志衆議院秘書)
石井 秀夫 (佐賀県議会議員)
江里口秀次 (小城市長)
横尾 俊彦 (多久市長)
田島 健一 (白石町長)
山口 隆敏 (有田町長)
前田 敏美 (武雄市副市長)
永淵 孝幸 (太良町副町長)
大久保政晴 (神崎市)
平野 重徳 (嬉野市名誉市民)
西川 平七 (嬉野市代表監査委員)
行武 久代 (嬉野市)
水川 清吾 (嬉野市)
杉光敬一郎 (嬉野市)
吉富 弘孝 (嬉野市)
橋村 稔 (嬉野市)
太田 孝志 (嬉野市)
牧 敦司 (醇建築まちづくり研究所)
王 曉矇 (九州大学)
嶋北ひろみ (九州大学)
国土交通省
国土交通省九州地方整備局
佐賀県職員
佐賀県立塩田工業高等学校建築科
長崎県立大学
中島 庸二 (嬉野市副市長)
杉崎 士郎 (嬉野市教育長)
嬉野市職員

基調講演 講師 両角 光男 (熊本大学名誉教授)

パネルディスカッション

司会 小浪博英 (EAROPH Japan)
パネラー 谷口太郎 (嬉野市長)
Norliza Hashim (EAROPH 事務総長：マレーシア)
Donnell Davis (EAROPH オーストラリア)
姫野 由香 (大分大学)
三井所清典 ((株) アルセッド建築研究所)

分科会座長

Norliza Hashim (EAROPH 事務総長：マレーシア)
Bernardus Djonoputro (EAROPH インドネシア)
小浪 博英 (EAROPH Japan)
佐保 肇 (EAROPH Japan)
西岡 誠治 (長崎県立大学)
西 英子 (熊本県立大学)
三島 伸雄 (佐賀大学)
有馬 隆文 (佐賀大学)
樋口 明彦 (九州大学)
両角 光男 (熊本大学名誉教授)

スピーカー

Azila Ahmad Sarkawi (マレーシア)
瀬田 史彦 (東京大学)
Novi Sunu Sri Giriwati (熊本大学 (インドネシア))
Tanachawengsakul Tanaporn (佐賀大学 (タイ))
Srinurak Nattasit (佐賀大学 (タイ))
穴井 祥一郎 ((株) IAO武田設計)
桜井 裕子 (NPO法人 日中韓観光協力機構)
Jae IK Kim (韓国)
IR. Hj Zafrul Fazry Bin Mohad Fauzi (マレーシア)
金谷 勇治 (EAROPH Japan)
Carlo Fundador B. Marudo (EAROPH フィリピン)
松尾 哲平 (嬉野市役所)
田中 智之 (熊本大学)
Huang PengXiang (佐賀大学 (中国))
Chen Chen (熊本大学 (中国))
松前 あかね (佐賀大学)
草野 泰宏 (熊本市政策研究所)
Miao Niu (大分大学 (中国))
Donnell Davis (EAROPH：オーストラリア)
佐土原 洋平 (九州大学)
Lu Weite (中国)
中村 享一 (一字一級建築士事務所)

協賛団体

- (独) 都市再生機構
- (独) 住宅金融支援機構
- (一・財) 民間都市開発推進機構
- (一・財) 小林国際都市政策研究財団
- 西日本高速道路 (株)
- (公・財) 都市計画協会
- 九州重粒子線施設管理 (株)
- (公・財) 区画整理促進機構
- (一・財) 公園財団
- (一・財) 国土計画協会
- (公・財) 自転車駐車場整備センター
- (一・財) 住宅改良開発公社
- (一・社) 全国建設業協会
- (一・財) 筑波研究学園コミュニティーケーブルサービス
- (一・財) 都市文化振興財団
- (一・財) 都市みらい推進機構
- (一・社) 日本建設業連合会
- (公・社) 日本下水道協会
- (一・財) 日本建築センター
- (公・社) 日本建築士会連合会
- (一・社) 日本公園緑地協会
- (一・社) 不動産協会
- (公・社) 街づくり区画整理協会

広告協賛団体

九州新幹線 (西九州)、三坂トンネル他 清水・青木あすなる・唐津土建 特定建設工事共同企業体
鉄建・竹中土木・深町 九州新幹線 (西九州)、俵坂トンネル (東) 他特定建設工事共同企業体
九州新幹線 (西九州)、大草野トンネル外1箇所外 東亜・あおみ・森永 特定建設工事共同企業体
九州新幹線 (西九州)、俵坂トンネル (西) 他工事 前田・松尾・下 特定建設工事共同企業体
九州新幹線 (西九州)、嬉野温泉駅高架橋他 若築・安部日鋼・有田特定建設工事共同企業体
株式会社 シーマコンサルタント
玉野総合コンサルタント株式会社
九州ひぜん信用金庫

協力団体

佐賀県立塩田工業高等学校
佐賀県立嬉野高等学校
日舞 「藤生会」
岩村ゆり (バイオリン演奏)
NPO法人 塩田津町並み保存会

本報告書は次のホームページからダウンロードできます。

The contents of this report are possible to download from the following website

<http://earoph-japan.org/>

EAROPH 2015 佐賀・嬉野地域セミナー 報告書

発行日 2015年 10月

発行者 EAROPH2015 佐賀・嬉野地域セミナー実行委員会

佐賀県嬉野市／都市計画協会国際委員会